

「福井県の自然観察」の企画・編集にあたって

伊 藤 十 治*

『福井県の自然観察』第1集（昭和51年1月10日発行）～第5集（印刷中）の完結をみるにあたって、その企画編集責任者として苦労話をおりませながら私見ではあるが記録にとどめたい。

＜第1集刊行時代＞

筆者は、教育研究所に勤務中なのでその当時の模様については詳細を知らない。たゞ企画・編集委員長であった藤田宗二先生が、生物教室にも見えられ福井県の自然観察という書物を刊行したいので協力してほしいと言われたことを思い出す。その当時は、県内では自然に関する基本調査や観察のしかたなどをまとめてみてはどうかという気運が盛りあがっていたことは事実であった。しかも、その気運が3本立てに要約される。その1つは福井県自然環境保全基礎調査報告書 福井県（昭和51年3月31日発行）にみられる専門家による学術調査がそれである。福井県教育委員会の教育研究所より、福井県の自然－野外観察指導資料－（昭和51年3月30日発行）の現場教師用のガイドとして立案・計画したものである。もう1つは、当中学校理科教育研究会の福井県の自然－観察の手びき（第1集）－（昭和51年1月10日発行）で子供用のテキスト・ブックとして出発をしたのである。

中教研理科部会から発行した『福井県の自然』が、教育研究所で発行しようとする『福井県の自然』とが奇しくも？ 同名のものが2冊できる結果になったのである。驚いたのは両者で、筆者等はこんなはずになるのがおかしいので、予め、両者の事務局の方ではちゃんと話し合いができていたはずと思っていたのに。しかし、そんないきさつはどうあろうと、結果的には中教研の『福井県の自然』が先に発行したのだから、我々の教育研究所の書名を変更すべきではなかろうか。しかも、教育現場が自主的・積極的にされたものを当研究所が応援することがあっても足を引っぱる（中教研発行の書物題名を変更させる）のはもってのほかではなかろうかというのか筆者自身の考えであり、この考えには一部には大賛成をしてくれたものである。しかし、現実は中教研側の変更になったのは妙な結果と言わざるを得ない。むしろ、正直言って、頭にきたのは当研究所側のオエラ方であったのだろう。筆者等は、冷静であったし、その間の事状は直接タッチしなかったから、どういう経過で中教研の書名を変更するようになったかは知らない。すなわち『福井県の自然－観察の手びき（第1集）－が福井県の自然観察 野外学習の手びき（第1集）となったのである。幸なことに筆者は前記した3本立て、すなわち学術調査；教師のガイド；子供のガイドにタッチできたということは、縁は異なるものとつくづく思う。

* 福井市明倫中学校

「福井県の自然観察」企画編集委員長

当教研の理科部会が発行した『福井県の自然観察 野外学習の手びき（第1集）』のあゆみとして、事務局長の大川善雄先生から次のような文が発表されたが、一般の方々には目にふれず削除の運命にあったので再度、記して記録を新にしたい。

昭和48年、県中教研理科の支部長会の席上で、牧田孫兵衛会長が『実地に照らして自然観を育成することなど全くできない状態であるから、当研究会で、生徒に自然観、環境を総合的なつながりにおいて生き生きと観察させ、理解させることのできる「手引き書」を作成することはできないものだろうか』と提唱されたのがきっかけであるという。昭和49年度の県中教研理科の支部長会でも『理科教育の中には、観察教材がたいへん多いにもかかわらず、大自然の中に生徒を飛び込ませ、自然に親しみ自由に学習させるということは、たいへん欠如していたのではないか』という意見が出て、一層、自然環境の中での理科教育の必要を再認識したのである。そして、理科ブロック長会を開催し、『福井県の自然を自然環境相互のつながりとして、生徒に理解させ、理科教材として利用できる手引き書』を作成するため、骨子草案づくりの小委員会を発足させた。

- (1) テーマ 理科教育に資する福井県下の自然環境調査
- (2) 目的
- 教師相互の研究の場とすると共に、福井県の自然環境の理解を深める。
 - 中学校の理科学習指導で、郷土の環境を教材により入れて理解を深める。
 - 自然環境の理解から、その保全に努める必情を育てる。
- (3) 事業計画
- 福井県の自然に関する資料を分野別（部門別）に分けて、各地区に整理し、総合的な資料収集をする。
 - 資料収集及び編集にあたっては、企画編集委員会を各ブロックより選出し、中学校理科学習の指導に合致するよう、精選、教材化する。
 - 各分野で、知識の豊富な中学校教員若干名を専門委員として依嘱し、現地講習会、学習会、情報交換会等を行なう。

この計画に対しては、県教育委員会、並に県教育研究所も賛意を示され、全面的な援助と指導助言をいただき……（略）……心からの感謝の意を表します。

この冊子は十数回の小会議や度重なる編集会議等を得て、漸く発刊することができました。もちろん完成したものではなく、更に5ヶ年計画で将来に統いて発展させていきたいと思いますので……（略）……より良き『手引き書』にしていきたいと思いますと結んでいます。

なお、執筆者代表の伊藤政昭先生は『自然観察の手びき利用にあたって、手軽な手びき書として私達と一緒に野外観察をするためにつくられたものです。だから、君達の遠足の友として、また、ハイキングにでかけるときのポケットブックとして利用してください』と述べられている。

教育研究所で『福井県の自然』を発行しようとした発端は、もともと松村敬二・齊藤寛昭両先生と筆者の3人で、野外観察の手引き書をつくるべくようかと談話の中で燃え始めたのである。それが、野尻第二課長、泉総務課長と個人的に話をしていたことが、第二課の行事として、それが当研究所の新しい事業計画として、みきり発車をしてしまったのである。基盤が煮つまらないのに、計画が進行してしまって（形式先行=ちょっと言い過ぎか？）；後から内容充実という苦しい状態が続行したのである。試行錯誤をしながら、場所の選定・第二課全員参加による総合

調査だから、一丸となって実施したのは今はよい思い出となっている。

<第2集>（昭和52年3月30日発行）

第1集に比べて、内容も多岐にわたり野外学習のしかたとして基本的な調査方法を解説し充実されてきた。そして、この一連のシリーズを学ぶことにより、自然を一層正しく理解し、自然を愛する心がめばえて豊かな心を養い、県政スローガンにしている『豊かさを築く、自然と心のみどり』を21世紀へと引き継いでほしいと、中野伝会長は述べられている。表紙も第1集に比べてカラーとなり、面白も一新してきた。

<第3集>（昭和53年3月30日発行）

企画・編集委員長を筆者にバトンタッチされ、企画・編集方針も第1～2集に比べてガラリと変えたつもりである。たゞ、基本方針は第1集刊行当時の理念をくずすことなく方法論的にアイデアを出し、読者対象も小学生・一般人と範囲を広げてみました。表紙も会員提供の写真によるカラー写真を用いた。内容は、特に図や写真を数多く、しかも大きく、文章も少なく、皆さんに少しでも親しみやすくしてみた。ところどころに『一口メモ』らしき民俗学上、民話・伝説などをおりませている。それらの代表的なものに、文殊山で昆虫を観察しよう、石徹白川流域の自然観察がある。

<第4集>（昭和54年3月30日発行）

福井県内の各地から示されたように、本県は豊かな自然に恵まれており、四季折々の変化にも極めて美しいものがあるが、私達はそのことを当然として深く考えることもなく暮している。しかし、この地に展開された地殻変動の歴史を知り、生物の精妙な好みを学ぶことは、単に『美しいながめ』から更に一步進め、眞の郷土愛を培う一助にしたらという県教育長の鈴木邦彦先生は述べられておられる。

特に、足羽川の自然観察では、川は生きているという理念のもとに、川と共に生活をし、あるときは恵みの川であり、ときには災害をもたらす悪魔の川であったことをしらべようとした。一方、江戸時代には福井城の外堀として利用され、河川交通の大動脈になったというこういった広い識見で自然をさぐってみようとしたのである。したがって、足羽川の歴史や変遷がどうであったかという理科的なものから社会科的な色彩の濃いものも含め、他の教科にもあてはまりそうな、いわゆる全教科的な面で足羽川の自然をとらえようとしたものである。

また、折りこみ式の大きな紙面にし、イラストで示して小学生にも一段と親しみをもたせようと努力をしてみた。筆者の考えでは、平面じゃなくて立体的な表現を用いて読者に一段と探究意欲をもたせ、自然と自然の中に自然に尋ねていくようにしたかった。すなわち、飛び出し絵本・立体絵本の応用を試みようとしたのである。しかし、これは金額の面で実現できなかったのは残念であった。そして、文面の中で、これだけはカラー写真にするのが学術的にも貴重な資料になるのもいくつかあったという。それを無条件で実現するのが当然だったのにもかかわらず、金額

の面でやはりできなかったのは企画・編集責任者としては失格であると深く反省している。

第3集4集と回を重ねるにつれて、参考資料とこれだけは調べてほしい、観察してほしい項目とに分けて書かれている。そして、読むときの疲れをなくするために、一段と学習意欲をかりたてる意味からもいろいろな方法を試みた。遊びながら自然を学びとる；自然の中でたわむれながら自然の美しさ・きびしさ・偉さなどを知る；自然からの恩恵、自然の驚異、自然からのいたずらなどを知る；自然に働きかけた先人のあしあと、自然と人間との相互作用など、こういったいろいろな点から分析し、それを総合的に自然をとらえようとしたものである。

＜第5集＞（昭和55年5月に発行予定）

今まででは、主に眼でもって自然をとらえようとしたのに対し、第5集では眼だけじゃなくて耳をも使って自然をとらえようとしたところに特色がある。すなわち、ソノシートでもって自然をとらえたものを入れてある。これは、五感を総動員して自然をながめていこう。そして、体感的にまず自然をとらえ、それらを知的に把握し、身と心とで自然に接していく。自然に生れ、自然に育ち、自然に帰っていく。心身共に変遷の中でおだやかな人生を送り、この自然の中での喜びを味わえるような人間になりたい。また、自然に感謝のできる人間になりたい。自然を知れば知るほど、自然の本質は深遠なものであり、人間なんて考え方によれば、自然に比べるとちっぽけな存在にすぎないことを感じとれる人間育成に利用したいものである。

表紙は、今までにない、すなわち表題のないものにした。これも、画面を大事にしようという意味と一体これは何だろうと意欲をかりたて、そして表紙をめくってみる動作を強いるためにしたものである。

昭和51年より、毎年1集ずつ発行してきて丁度今年が完結年になっている。筆者も3～5集まで、内容面についていろいろと企画編集委員に無理な注文しました。しかるに、各委員の方々はその趣旨をよく理解され実践して下さったことに対し、紙面をかりて厚く心から謝意を申しのべたい。光陽中学校の理科教科会の諸先生にもこれまた厚く御礼を申し上げたい。ほんとうに、筆者のようなものをお助け下さい、ありがとうございました。